

無意識の差別

問 教育委員会事務局人権・同和教育係 ☎ 0943-32-0093

多くの人にとって差別問題は他人ごとで、自分自身の問題であるという認識はありません。差別問題について問われたとき、「自分は差別なんかしていない」と答える人が多いのではないのでしょうか。

近年テレビなどのメディアでは、差別的な言葉を耳にすることはなくなりまし。しかしそれは、差別がなくなつたということではなく、ただ差別用語が自主規制されているに過ぎません。残念ながら今もなお、差別は根強く残っています。

「差別はダメ」ということは、ほとんどの人が知っています。しかしながら差別がなくならないのはなぜなのか。それは、私たちの心の奥底に、知らず知らずのうちに育っている差別意識に起因します。

私たちの中の差別意識

差別意識は誰もが無意識のうちに持ちかねないものです。例えば年齢による偏見や思い込み。中高年や高齢者が「若者は考えが浅い」と決めつけたり、言葉が理解できないからと「若者言葉だ」「言葉の

乱れだ」と指摘したりする声が聞かれます。

逆に若者の中には、年上の人の意見を「おじさん臭い」「おばさん臭い」と軽視し、聞く耳を持たない人もいます。人種や国籍による印象の違いもあります。私たち日本人の中で、まちですれ違った外国人が欧米の人ならば引け目を感じたり、アジアの人ならば見下したりしている人はいないのでしょうか。

そのほか職業や学歴、性別、生活のあり方など、さまざまなどころで差別意識は生まれます。

慣習と差別意識

社会での慣習が罪悪感と関心を薄め、差別意識を育てることも少なくありません。

20年前、カナダのバンクーバーで妻を殴ってケガをさせたとして、日本の総領事が地元警察に逮捕されました。取り調べの際、総領事は「家で女房を殴るのは日本の文化だ」と説明し、カナダのメディアに大きく報道されました。総領事は後に解任され、帰国命令を受けています。

これは女性を下に見る、悪しき慣習が表面化した例の一つです。「昔からやってきたことだから」「みんながやっていることだから」と、意味を深く考えずに抱いていた差別意識が、大きな事件へとつながりました。

「夫である自分の言うことは正しい」「妻は夫の言うことを何でも聞かなければならない」という、現代のハラスメントに通じるものがあります。

自分の中の差別意識と向き合う

私たちの中の差別意識、それは目に見えず、気づきにくいものです。しかし、誰もが自分らしく生きていける社会をつくるには、一人ひとりが自分の中に隠れた差別意識に気づき、それと向き合う必要があります。

偏見や思い込みの多くは、正しい情報を知らないことで生まれます。学校や地域、職場などで正しい情報を学び、真実を次世代に伝えましょう。今を変え、未来を築く一歩になります。

「自分は差別なんかしていない」と思っていたら、正しい知識を得ることはできません。「自分の中にも差別意識があるかもしれない」と考え、振り返る必要があります。

差別について考えることは、悲しい思いや辛い経験をした人のことを考える、というだけではありません。自分自身がどう生きるかを考えることでもあります。

自分の中に、自らの基準に合わないものを排除するような考えはないのでしょうか。あるいは何らかのきっかけでふと、いつもと違う心の働きかけに気づくことはないでしょうか。そのときが、自分の中の差別意識と向き合うチャンスです。

気づきにくい差別意識、見落としていませんか？ 自身を振り返ってみましょう。



下廣川村の『村會事蹟留』にみる 明治時代の制限選挙

【その2】

下廣川村の議員定数は12人

明治37年5月29日に執行された村会議員の定期改選で、一級議員3人、二級議員3人の改選が行われました。当時は一級・二級ともに、議員の半数が3年ごとに改選されていたことから、議員定数は一級・二級合わせて12人であったことが分かります。

選挙録によると、投票所は役場で、8時から11時までは二級議員、13時から16時までは一級議員の選挙が執行されています。明治37年の有権者数は不明ですが、直近の明治41年では3689人となっています（『下廣川村誌』）。

当時の二級議員選挙の投票総数は237票。連記方式により、候補者5人の総得票数は708票、無効票は1票でした。一方、一級議員選挙の投票総数は63票、候補者9人の総得票数は187票でした。

有権者は、一級議員選挙で総人口の約2パーセント、二級議員選挙で約6パーセントに過ぎません。当時の選挙には納税要件があったことから、多額納税者に有利な制度だったことが分かります。

当選者は「請書」を提出

村長（選挙掛長）は八女郡長へ、選挙執行の結果をまとめた「選挙録簿本」を届けます。当選者へは、次のような文面を通告しました。

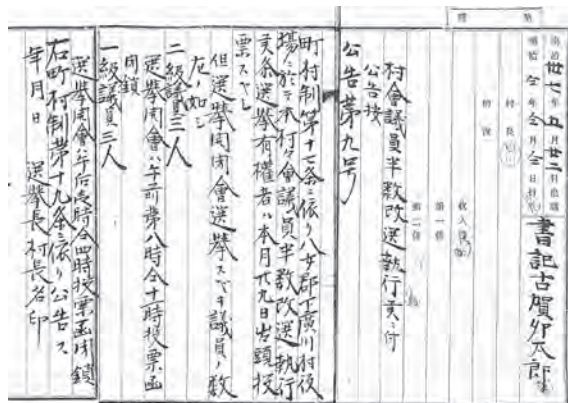
本日、本村会議員定期改選二付、一・二級選挙相成候条、此旨及通告候也。

追テ来ル六月三日迄、請書御提出無之ニ於テハ、当選ヲ辞シタルモノト見做ス。

明治37年 月 日
選挙掛長 下廣川村長 園田卯太郎（印）
二級当選者名 人
一級当選者名 人

この中の「請書」とは、次のような文面になります。

請書
本村々会議員定期改選一級選挙二当選相成候、御受仕候也
八女郡下廣川村大字 廣川
氏名（印）
明治37年5月30日
下廣川村長 園田卯太郎殿



村会議員一級・二級議員選挙の執行公告案（明治37年5月22日付、下廣川村役場）

実は当時の町村議会議員選挙について、極めて興味深い事実が判明しました。どうやら本選挙に先立ち、行政区（当時は村）ごとに本選候補者の予選を行ったというのです。区長が予選当選者を「村会議員予選報告」として村長へ提出し、この予選当選者が本選挙の候補となったようです。これがはたして一般的で、どのような手続きだったかは不明です。しかし明治37年5月の村会議員選挙では、間違いなく行政区ごとの予選会が行われたことが、『村會事蹟留』に記録されています。

広川町古墳資料館だより

日本最大級の前方後円墳である大仙古墳（大阪府堺市）は、全長486m×高さ34m。当時の土木技術では、工期約16年、作業員数680万人、経費796億円という大国家事業であったようです（大林組試算）。

広川町では昨年、石人山古墳の石棺を現代の技術で復元しました。必要な石材の調達や加工技術をもつ石材店の選定、ワークショップによる石棺表面の彫刻技術の練

習など、課題も多くありましたが、楽しくも興味深い日々でした。地域を代表するモニュメントとなる前方後円墳の築造には、膨大な工程と労力・財力を要したことを実感しました。

ちなみに石人山古墳の築造経費は、大仙古墳クラスを参考にして古代工法で試算すると、工期6年間、作業員数28万人、経費117億円になるそうです。